

愚公移山

昨年の十一月と本年三月の二度、中国西安市に在る西北大学を訪れる機会を与えられた。旅行の道程で見聞した中国の人々の姿と諸状況は、さまざまな形で私に深い印象と感銘を与えるものであった。

今回の旅行中、私は中国農村部のあちらこちらで、民家の壁や工場の塀に「愚公移山」と大書されているのを見た。これは四つの現代化を推進するうえでの、大衆に対する呼びかけのスローガン(標語口号)で、中国が現在直面するもろもろの困難を克服して目標を達成しようではないかという意味のものであった。もともと中国語には成語(諺)がたいへん多い、漢字文化の一つの特性であろうか、一定の意味あいと音をもった語(漢字)をうまく並べることによ

木村 健 二

って、生活の智慧やら教訓、思想など、世の中や人の情をズバリと描き出していて、またそれらの中には中国の故事に由来して意味が深く、話としても面白いものもたくさんある。いまかりに、中日辞典を開いて目についた衆(衆)の一字を見ても、衆寡不敵(衆寡敵せず、衆口難調(衆の意見が一致することはむずかしい、衆口練金(根拠のないことも皆が言う)とそれが事実の如くなる、衆怒難犯(衆人の怒りを買うのは恐ろしい、衆叛親離(衆人や親しいものが離反する、衆擎易拳(皆が力を合せてやると成功する、衆人拾柴火焰高(多くの人がやればそれだけ力も強大になる、衆星捧月(多くの者が中心を取り捲いている、衆矢之的(多くの人の非難のま、)などなど教え

ればきりが無いほどである。

そのような成語の一つとして「愚公移山」は列子(戦国時代 列禦寇の作と伝えられる)八巻のうち湯問篇に描かれた寓話であり、あら筋はおよそ次のようなものである。

「昔、山西と河南の境界のあたりに、北山の愚公というもう九十に近い老人が住んでいた。家の南側には、太行山、王屋山という二つの大きな山があって、太陽はさえぎられるし、山の北側が道をふさいで家の出入りにも不便を感じていたので、或る時愚公はその二つの山をどこか他の場所に移そうと考え、家の者や親類の者達を呼び集めて仕事にとりかかった。掘り出した土は箕(み)や畚(もっこ)にのせて、遠く渤海の海辺まで往復に一年もの月日をかけて運んで行った。この有様をみた河曲の智叟(黄河のほとりに住むかしこいぢいさんの意)は、おまえさんのその歳でなんとという馬鹿げたことをと嘲笑したが、愚公は、私が死ねば息子が運ぶ、息子が運びきれなければ孫がいる、孫はまたひ孫を生む、子子孫孫運びつづけるならば、山はみずから大

きくならないのだから、いつかは必ず平地になる」といってその仕事をやりつづけた。山の神（操蛇の神）が、彼のひたむきな心に感じて力を貸し、ついにその二つの山は他の場所（山西の北と西の地方）へ移し終えられた」というものである。

つい最近までの中国では、都市部でも農村部でも、愚公移山のような政治目的或いは生産目標を示すいろいろなスローガンが、ところせましとばかりにぎややかに張り出されていたようである。しかし、現在ではこの愚公移山や工業学大慶などほんの数種が残されているだけで、かつては我々もよく知っていた有名な農業学大業をも含めて多くのは消し去られてしまつて、その痕跡のみを壁にとどめている。

愚公移山の寓話については、寧鳩巢（江戸時代）のように、愚者はほんとうの智者であり、智者をもつて自ら任ずるものは本当は愚者なのである」といった解釈もあるが、そういった意味ではなく、勉めてやまなければ大事も必ず成し遂げることができ、の意味にそれを解して、中国革命達成へのスローガン（標語口号）の一つとし

て取り上げたのは毛澤東であると教えられた。長征のあと延安に到着した党と紅軍は、一九三六年そこで第七回中央委員会を開催した。席上毛澤東は革命運動遂行にあって有益な教訓としてこの寓話を引用、太行、王屋の二つの山を帝國主義と封建主義にたとえて掘り崩してしまふべき対象とし、革命の目的を堅持しながらあらゆる困難に勇敢に立ち向い、忍耐力をもつて一步止むことなく前進するならば、ついに山の神即ち中国人民大衆の心を動かすことができるであろう。そして、中国人民の上に重くのしかかった帝國主義と封建主義という二つの大きな山もきつと掘り崩してしまふことができるであろうと述べた。

中華人民共和国成立ののちは、愚公移山は、改造山河、改造中華の「スローガン」として用いられ、さらに文化大革命終結後の今日では、現在の中国の最大課題たる四つの現代化実現へ向けての「困難克服」の「スローガン」として生きつづけているというところであった。

もう一つ、これと似たような息の長い根気を尊ぶ話をつけ加えさせていただくと、

「只要功夫深、鉄棒磨成針」というのがある。秦代の末期（紀元前二世紀頃）まだ幼かった張良が、一心に鉄棒を磨く老婆の姿を見て、「おばあさん、一体何のためにそんなに辛苦しているのですか」と尋ねて、長い時間ひたすら鉄棒を磨いて針をつくる話をきいた。老婆はつづけて、苦しくとも毎日たゆまず勉めれば鉄棒でさえも鋭い針とすることができる。人も勉めれば将来必ず偉い人になって世の為に役立つことができるのです」と教えられた。強く感ずるところのあった張良は、そのうち黄石老人から兵法書を授けられ、劉邦の挙兵に加わって鴻門の会に劉邦の危難を救い、ついには項羽を破って漢王朝の基礎を築いたことは我国でも教科書にまでとり上げられて、広くよく知られた話である。

中国を旅することはたいへん楽しい。目に映るもの一つ一つにしみじみと感じさせるものがある。愚公移山は私自身にとって大へんよいおみやげになった。

（本部庶務課長）